



水滸 佛語

宇和傳奇人集

下

| |
|------|
| ^ 13 |
| 3137 |
| 2 |



門 八 13
號 3137
卷 2

昭和九年九月十二日購求

永荷 俳諧 宇加と奇入集卷之下

東都 青林亭錦八著

改元 舟に 鯉 とくくとく

飯倉 清元壽美太夫

あつとと 茶番の名人 ちてわらうき 遊升とりの人小町娘と
かりり 壽美太夫 関と関とかりりて 関の戸の狂言を確
処たるや 壽美太夫 関と関とかりりて 関の戸の狂言を確
大末 関と関の 宗貞 花より 小町 娘かろ 山居の 淨瑠璃
て ありの 撥半 増く ますり 提燈が 悪の 問答も 漸て 下の
表とかりりも 関と関と 解も 飯より 漸て 下の
早をええて 一は 壽美太夫 関の 狂言は 眞の 一天 今月 今

龍之百年ふくあふふの孫辰切て種家本とりて
の誓の神と祭つてしまふ大熊成彩心の手と白眼と所
野の糸切とて遊の牛に前を六見物悪口み「ライ白玉ハ
一結いづくぞ

品川 文 治

佐名木の尖くをまよ雅は青のりやまう「ア隣ざしまを
豊後節又増ののまんとり「替向おとや「ア升屋の
客のたあまん「まう「文治おもちうをぶらませう「十三文
治し「よう「り「り「ぞや「雅へ「ま「こ「ま「治でもらう「の文治
あら「ま「や「ま「の「ま「ま「り「ま「「も「懸「ふ「丹「こ
とま「「親「が「ま「「や「ま「「ら「今「退「と「昔「「て「あ「の「文「治「ま「羽「織

老の「の「物「の「の「四「あ「く「あ「む「づ「け「く「事「の「ま「わ「さ「や「さ「ん
る「の「津「の「の「の「ま「井「の「り「の「に「隣「の「な「の「む「け「ま「り「口「の「り「ひ「ん「
小「の「ま「ま「の「文「治「の「あ「と「客「ま「り「て「ア「か「文「治「の「あ「ら「の「の「ま「の「
文「治「の「あ「ら「う「遠「め「て「わ「る「ぞ「く「「「。ま「げ「と「ま「く「ま「り「ト「ま
「の「の「ま「ま「ら「ら「る「の「席「に「「あ「ま「る「挂「文「治「ト「ま

品川

長門屋菊之進

第「の「く「ま「む「む「ま「な「か「え「け「る
文「の「ま「ま「ら「ら「る「の「小「親「は「刑「の「舟「の「り「の「ま「千「景「の「何「の「
ま「山「川「作「義「徳「「コ「ヤ「第「の「を「け「ら「や「て「指「う「己「ハ「具「入「ま「の
ま「の「め「の「の「の「ま「は「星「が「お「遠「く「て「の「井「く「毎「日「か「つ「け「り「の
「「の「井「ま「あ「か「ま「ま「ん「が「大「作「業「ト「て「お「ま「ま「ま「ま「ま「ま「ま「ま「ま
「ま「ま「ん「時「日「も「今「日「の「ま「の「連「り「の「あ「ま「が「ま「の「ま「ま「ま「ま「ま「ま「ま

可成りそとて思ふに、
かゝるの山物たるあり、
九月朔日、
祈禱もあつたが九月の神を祭つたものと云ふ

品川

くまなくと四月後の精進
其言のなるも其言の
大山の山頂の湖が
湖の
湖の
湖の
湖の

くまなくと四月後の精進
其言のなるも其言の
大山の山頂の湖が
湖の
湖の
湖の
湖の

品川

大野屋万治

くまなくと四月後の精進
其言のなるも其言の
大山の山頂の湖が
湖の
湖の
湖の
湖の

の... 實の 後... 街... 志... 御... 宜...

品川

下まど... 清元澤太夫... 入相... 御...

み... 道... 一... 二... 三... 四... 五... 六... 七... 八... 九... 十...

湯島

清元千代太夫

神馬... 御... 入相... 御...

一才ハ五分七厘速ノ事ノ群集ニ飛テ驛ヲ行ニ變テリ
也青橘ノ事トモ大報公持テ之ノ人ノ禪流ノ皮角カ
也風神ノ酒ト東ノ大國并報ノ金銀ノ水トカ
也大徳ト隨神門四本柱ノ山門ト四十子ノ又重ノ塔
也後ト身徳トクニ強判ノ口ト徳ノ口ト編樓ノ口ト
也連トミケトミケト様水ト呼通人トコト子ト子ト
也酒志トトノ異見ト今月ト酒ノ飲納トテト具ト運
也移トトトトトトトトトトトトトトトトトトトト
也世トトトトトトトトトトトトトトトトトトトト
也雪門ノ歌仙
其トトトトトトトトトトトトトトトトトトトト
也川口トトトトトトトトトトトトトトトトトトトト

播場

一才ハ五分七厘速ノ事ノ群集ニ飛テ驛ヲ行ニ變テリ
也青橘ノ事トモ大報公持テ之ノ人ノ禪流ノ皮角カ
也風神ノ酒ト東ノ大國并報ノ金銀ノ水トカ
也大徳ト隨神門四本柱ノ山門ト四十子ノ又重ノ塔
也後ト身徳トクニ強判ノ口ト徳ノ口ト編樓ノ口ト
也連トミケトミケト様水ト呼通人トコト子ト子ト
也酒志トトノ異見ト今月ト酒ノ飲納トテト具ト運
也移トトトトトトトトトトトトトトトトトトトト
也世トトトトトトトトトトトトトトトトトトトト
也雪門ノ歌仙
其トトトトトトトトトトトトトトトトトトトト
也川口トトトトトトトトトトトトトトトトトトトト

けり如解み新の... 田舎もの「すこ」... てもござん... 料理番... のうたを...



中橋

岡本重兵衛

千門萬戸小酒色... 市場の繁昌酒池肉林... 望む水代橋... 胡直一の...

ておん人あさの... なるちひさ... 望む水代橋... 胡直一の...

田中

十寸見沙洲

さき年... 人と楽... 男と... その... ま...

おとけ若男とのふさぎをばさる井が突ふる言ひをきき
より願言糸の降るく入るる替り百糸胡多きと記し
金屋のふともものへおぼせ暗して吾形眼前に多体
巻着由佳句の海がまきと嘆くトて生涯百糸の白く
せんし叫ぶ兵さるる多し俾毒り一具那さるる
じんえ井ううさぞおぼせさるる城はるが目の下に
じんえ井ううさぞおぼせさるる城はるが目の下に

○ 木原店 富本大和太夫

修多お柳のすくみる大落
兼倉の南平野の放か首行の街あり
川岸の海道乗り下り五拾之次の初宿あり
標客も此知み遊んで一夜の歌楽千金
十王の突め後おぼせさるる城はるが目の下に

朝ゆり一モレ急度素とちかよとよ嘘と海とまうあ
室の内を流るる客人が忌妬いうと
間も旦那さんが客人を何とて
湯婆飯玉の女息其を人々の室
人々富本の太和太夫に似る飛鳥

○ 永代 富本のりは太夫

替り百糸胡多きと記し
金屋のふともものへおぼせ暗して
吾形眼前に多体
巻着由佳句の海がまきと嘆く
トて生涯百糸の白く
せんし叫ぶ兵さるる多し俾毒り
一具那さるる
じんえ井ううさぞおぼせさるる
城はるが目の下に
じんえ井ううさぞおぼせさるる
城はるが目の下に

の形跡の今も猶ほく月に入替ふ所々の變に則ちかく懐懐い
あはれき神の後の甚き思ひの程をみゆく千夏の事かむ神祇の
方々を尋ねて蘇の道々を歩む日下と同一の道に江都へ去るの松雲
「春は」意味は蘇の政務とて言ふれどもははるのけしきも又ゆる早
春は「春は」私もさうとてあつたなり 樹木の形は見えなくも兵
「春は」あつたなり 松雲のつらみのつらみは「春は」佳くかうりつるの松
とてかゝりね「春は」あつたなり 松雲のつらみのつらみは「春は」佳くかうりつるの松
つらみのつらみは「春は」あつたなり 松雲のつらみのつらみは「春は」佳くかうりつるの松
つらみのつらみは「春は」あつたなり 松雲のつらみのつらみは「春は」佳くかうりつるの松

名取入門 常盤津若大夫
名取入門 常盤津若大夫
名取入門 常盤津若大夫
名取入門 常盤津若大夫
名取入門 常盤津若大夫

らんとし集るゝ兵中へは勇烈の由乃二文ノテ源次此をのたまふとの
辭はゆらやアあまアはまはれんぜ「そのやア」後が云の舟邊
もうつゝ内由も因合若や「其辭が上」も「そのやア」そのやアを
の松そのやアをさうとて平へ「其辭が上」も「そのやア」そのやアを
りつとてあつたなり 松雲のつらみのつらみは「春は」佳くかうりつるの松
つらみのつらみは「春は」あつたなり 松雲のつらみのつらみは「春は」佳くかうりつるの松
つらみのつらみは「春は」あつたなり 松雲のつらみのつらみは「春は」佳くかうりつるの松
つらみのつらみは「春は」あつたなり 松雲のつらみのつらみは「春は」佳くかうりつるの松
つらみのつらみは「春は」あつたなり 松雲のつらみのつらみは「春は」佳くかうりつるの松

月 新うゝ馬き山のころとせけり
岸澤市太郎
岸澤市太郎
岸澤市太郎
岸澤市太郎

明治廿九年七月書之

鈴木知以子

之
之
之